

# 閉ざされたフィールドを拓く

## ——エスノグラフィー論——

白松 賢

### 1. 「逸脱イメージ」：汚染あるいは資源？

私たちは、「逸脱」カテゴリーを社会階層と結びつけたり、倫理規範の薄さと結びつけたり、粗野な人間像と結びつけたり、閉ざされた集団像と結びつけていないだろうか。一方で、「逸脱」カテゴリーを豊かで開放的な生活と結びつけたり、倫理規範をもった常識的な世界としてみなすことはありえるだろうか。

教育社会学の質的研究では、「イメージ」に表出される調査者の自己（関わりや態度等）はあまり研究の俎上にあがっていない。なぜならば、調査者の持ち込む「イメージ」（関わりや態度）は「潜在的な汚染源」であり、「隔離され、中和され、最小化され、標準化され、統制されるべきもの」（Fine et al 訳書 2006, 89頁）という観念は教育社会学の質的研究においても根強く残っていたためであろう。「意識的中立性」に重きをおくインタビュー方法や記述の方法では、調査者の介在は排除される方向にある（Maanen 訳書 1999, Emreson et al 訳書 1998）。「学級」や「学校」等の制度的場面を対象にするならば、「調査者」を観察者というアイデンティティで整理し、写実的かつ実証主義的に記述することは受け入れやすい。もちろん調査者の影響をなくすことは不可能であるが、調査（観察）者の影響を過度に自己内省することも「実践性・有用性」（酒井 2004）を失った「解釈ゲーム」となる可能性につながる。加えて、学校現場になじみのある読者（学会のオーディエンス）が多く、描かれた「リアリティ」を読解したり、評価したりすることが可能である状況を鑑みると、教育社会学において、写実的で実証主義的なエスノグラ

フィーは依然として重要な調査方法であるともいえる。

ところが私たちに馴染みの薄いフィールド、例えば「逸脱」の領域では、この問題は障壁となってたち表れやすい。「イメージとは、現実についての作業概念、印象、またはモデルである。あるものに別のやり方で、あるいは違った視点からアプローチしていたら、それが違った風に見えるはしなかつただろうかという問いを私たちはたえず耳にする」(Gubrium and Holstein 訳書 1997, 76頁)。

では私たち調査者のもつ「逸脱イメージ」は調査を汚染するバイアスであろうか、それとも資源だろうか。この問いが本稿の出発点であり、「逸脱イメージ」(調査者の関わりや態度)を調査及び解釈の資源として活用する方法を明らかにできれば、「逸脱」のフィールドを新たに拓くことを可能とするという認識を示す。この方法は、ある現場での経験に優位性を表す「リアリティ特権」に対して懐疑的なまなざしが向けられている現在、他のフィールドのエスノグラフィーを豊饒化する上でも、重要な議論を提供すると思われる。

そこで本稿は、第一に「逸脱」領域のフィールドワークの障壁(調査者を汚染とみなす認識の問題)を考察し、第二に調査者の「イメージ」を調査及び解釈の資源とする方法、主に記述の方法を明らかにする。そして第三に実際のフィールドワーク(マジックマッシュルーム経験者への再調査の成果)をもとに、その有用性を考察する。

## 2. 拓かれたフィールドへ

### 2.1. 「逸脱」世界への「扉」

「調査者のバイアス」の問題に代表されるように、「逸脱」フィールドへの参入の障壁は、実証主義の認識論(「論理科学モード」)によって導かれる。例えば、「逸脱」と呼ばれる集団のメンバーになることは可能か。「逸脱」と言及されるフィールドに参入したとしても、「彼ら彼女らは真実を語るのか」といった批判にさらされる可能性がある。これは「論理科学モード」において語り手(研究協力者)を唯一の真実を持つ「回答の容器」(Holstein and Gubrium 訳書 2004)とみなす認識によって生じる障壁であり、その真実を忠実に取り出すことがインタビューの技法であると考えられてきたためでもある。

しかしながら近年の質的調査の展開では、「質的か量的か」という調査方法の問題ではなく、「論理科学モード」と「ナラティブ・モード」と整理されるように、「語られた経験」についての理解の形式が話題となっている(Bruner 訳書 1998,

## 閉ざされたフィールドを拓く

White and Epston 訳書 1992, 野口 2005)。わかりやすく言えば、質的調査において、物語（実在する真実：正しい回答）を語り手から引き出すという理解の形式をとるか、物語（社会的事実）を調査者と語り手との共同製作によって生み出すという理解の形式をとるかの違いである。

具体的に「逸脱」と言及されるカテゴリーに対して、意識的中立性を保って向き合えるだろうか、という問いはわかりやすい例だろう。この問いへの答えは歴然としている。そうありたいと努めることは可能であっても、我々はすべての言説や観念から無縁ではない。「逸脱」の質的研究において「エスノメソドロジー的無関心」や「構築主義の状態性についての判断留保」も、調査ツールの一つにすぎない<sup>(1)</sup>。カテゴリーに対する調査者の「イメージ（質問や話）」は意識的であれ無意識的であれ、経験についての彼ら彼女らの解釈活動を水路づけているわけであり、解釈や記述から切り離すことは不可能である。むしろ調査者の「イメージ」はそれぞれのメンバーの経験とどのように結びつけられたり、どのような解釈を産出するか、という解釈資源と捉えるアプローチの必要性を示す。

そこで「ナラティブ・モード」の認識に立てば、Bertaux（訳書 2003, 89頁）の指摘するように、「すべての社会的世界は、開けることのできる入り口の扉をもっており」、「研究対象が《状況のカテゴリー》型のものであるなら」、「関心を持つ人たちは人びとのなかに散らばっている」ことを強調したい。例えば「大麻（マリファナ）使用者」「暴走族」「校内暴力」という「逸脱」カテゴリーに着目するならば、そのカテゴリーをめぐるトークや〈語り〉にアクセスすることは多様な場面で可能である。

すなわち「逸脱」領域のエスノグラフィーは、必ずしも、「逸脱」集団のメンバーになることではない、という認識論的転回は、〈閉ざされている〉と考えられやすいフィールドの見方を開放し、アクセスの可能性を広げることになる。実際の当事者（逸脱とみなされる人々）のみならず、かつての経験を語れる人やその周囲にいる（いた）人の〈語り〉にもアクセスできる。また全く使用や経験を持たなくても、そのカテゴリーについての人々のトークや〈語り〉にアクセスすることができる。このように「ナラティブ・モード」の視座を研究に組み込むなら、「逸脱」のフィールドは無数に拓かれると考えられる。これはフィールドワークの限界ではなく、認識論上の可能性である。そして倫理コードにおいて参与しがたい領域にも、限定的な足がかりが拓かれる。

## 2.2. ナルシスト的自己省察の抑制

「逸脱」のフィールドへの扉を開いてみたものの、次に「ラディカルリフレキシビティ」(Pollner 1991)の議論が「ナラティブ・モード」におけるフィールドワーカーの障壁としてたちあらわれる。例えば中河(1999, 282頁)が構築主義アプローチのOG問題で指摘したことと同様に、「ラディカルリフレキシビティ」の議論はエスノグラフィーにとっても「無限後退の自己省察の袋小路」になりかねない。例えば、どこまでが「語り手の実在する経験」でどこまでが「調査者と語り手の共同製作物」なのか、という解釈の迷路に入ると、論文の公刊自体が困難になる場合も往々にしてあるだろう。

教育社会学における研究の実践性や有用性を鑑みるならば、「自己省察の袋小路」を抑制する方法が必要となる。そして実践性や有用性において「何故、彼ら彼女らは逸脱をするのか」という問いは、原因論だけではなく、「逸脱」カテゴリーの解釈実践そのものへの問いでもある。この強調は、「逸脱」のエスノグラフィーとは何か、を問いかける。すなわち、「逸脱」領域のエスノグラフィーの関心は、「逸脱」カテゴリーをめぐる解釈実践という過程であり、それは「彼ら彼女らの生きられた経験」であったり、「彼ら彼女らの経験の解釈」であったり、「他のカテゴリーとの接合や分離の有り様」と換言できる(桜井 2002, Holstein and Gubrium 訳書 2004)。そしてメンバー(研究参加者)のカテゴリーに基づく相互作用を詳細に解釈=記述し、その上で、調査者及びメンバーの意図的あるいは無意図的に持ち込むカテゴリーに表象される「逸脱イメージ」がどのように触媒の機能を果たしたり、解釈実践と関わるかに関心をよせることである。

## 2.3. 記述の方法

調査者の「イメージ」を資源化して「解釈実践」を描き、かつ「自己省察の袋小路」に入らないためには、記述方法について整理しなければならない。そこで記述方法について、段階の整理にはEmerson et al 訳書 1998の「筆記モード」と「読解モード」(148-149頁)に着目し、「自己省察の袋小路」を防ぐ方法を用いる。そして解釈資源化には「内容(生きられた経験や語られた経験: what: 何が語られるか)」と「方法(語り方: how: いかに関与されるか)」の整理を用いる(Holstein and Gubrium 訳書 2004, Gubrium and Holstein 訳書 2006)。

まずエスノグラフィーでは、記述の第一段階に「筆記モード」が用いられる。「内容」に着眼することがエスノグラフィーの調査方法上の特色であり、フィール

## 閉ざされたフィールドを拓く

ドワーカーは「何を聞いたか」「何を見たか」「何が語られたか」「何がおこったか」という「内容：観察した経験や語られた経験」をまずは記述することになる。

第二に「読解モード」は「内容」と「方法」に交互に着目して解釈実践を記述する段階である。その「方法」には、(1)メンバーの「方法」(内生的リフレクシヴィティ, Pollner 1991)と、(2)調査者とメンバーの「方法」(自己言及的／ラディカル・リフレクシヴィティ, Pollner 1991)とがある。この段階では、「内容」とともに「方法」をふまえた「解釈実践」に関心が移行することになる。そして記述の対象となる「方法」は「意味が産出され、可視化される方法」であり、「解釈実践」とは「現実を理解し、組み立て、表象するために使われる手続きとリソース」である(Holstein and Gubrium 訳書 2004, 48-49頁)。その「意味産出」や「解釈」における「カテゴリー」や「言い回し」には「方法」とともに「内容」が重要な役割を果たしており、本稿で強調したい点は、「読解モード」においても「内容」に主眼をおく記述方法を検討していくべきではないか、というエスノグラフィーの特色である。これは「方法」に主眼をおくことでその利点を発揮出来るエスノメソドロジーに対して、エスノグラフィーは「内容」に主眼をおきながら「方法」についてもリフレクシブな態度を持つことで研究方法の利点を強調できうる、という戦略的な記述の「方法的実践」(古賀 2001)の提案でもある。すなわち、エスノグラフィーにおける「読解モード」は、「筆記モード」でテキスト化した「内容(what)」の物語を、「方法(how)」にも着目して「読解モード」でリフレクシブに解釈する方法である。

さらに記述に際して、「一人称(私)」「三人称(彼ら彼女ら)」の視点による〈語り〉を詳細に記述することで、「イメージ」(調査者の自己)を「解釈資源」に転換する。「写実的物語」の記述スタイルの批判では、「全知者」の視点で記述する調査者の無自覚さが問題であり、「エスノグラファーの参加体験を他者が報告した内容と一緒にたにし、出来事がもちうる意味についてのさまざまな理解の仕方について解明する上で必要な複雑なプロセスを見えにくいものにし」、「状況依存的な解釈プロセスを無視してしまう」(Emerson et al 訳書 1998, 138頁)ことが問題であった。そこで「一人称」と「三人称」の〈語り〉を描くことで、「相互作用を通して現場の人々がおける具体的な社会的現実を構成し維持していくプロセスを詳細に記述していく作業」(Emerson et al 訳書 1998, 50-51頁)を担保し、その相互作用を読者に開き、解釈されたり、批判されうる経験的資料を提供することが可能となる。

### 3. フィールドワークの経緯と過程

本稿では、「イメージ」（調査者の自己）を触媒とした解釈実践を記述するフィールドワークの方法を、「マジックマッシュルーム」経験者の調査で実践する。

本フィールドワークは1998年から2002年にかけて調査を行った「マジックマッシュルーム（当時は法律の規制対象外）」経験者を対象とする。そして中心的なメンバー（研究協力者）であったコージロウとマッティに、2008年9月中旬に再度インタビューを行った。また当時インタビューをしていないものの、フィールドワークの最中で何度もあったヨシキにも話を聞く機会を得た。本稿の解釈＝記述では、このインタビューを中心とした経験的資料を用いている。なおインタビューのトランスクリプトでは、コージロウ（K）、マッティ（M）、ヨシキ（Y）、筆者（S）と表記している。

「マジックマッシュルーム」に関する「フィールドワークの終了」は2002年9月に当時のメンバーに告げた。今回、彼らにとって「マジックマッシュルーム経験とは何だったか」ということと現在の人生の中でどのような〈語り〉が構成されるかについて関心を再度もったため、2008年7月、コージロウに関心や経験的資料の扱い方などを説明し、二つ返事で承諾を得た。その際、9月に彼らが集まるのでそれに来ないか、と誘われた。その後、マッティとも電話で連絡をとりあい、彼らの集まる場に行くことを話した。その際にインタビューのお願いをし、二つ返事で承諾を得、インタビュー時にそれぞれ再確認した<sup>(2)</sup>。2008年9月中旬に、彼らと会い、マッティの宿泊しているホテルの部屋でマッティにインタビュー（1対1：80分）をし、終わった後部屋に入ってきたヨシキを交えてグループインタビューを45分間行った（1対2）。その後、遅れてやってきたコージロウとは、別の場所に行き、60分のインタビューを行った（1対1）。

### 4. 解釈実践の記述

#### 4.1. 「笑いのフレーム」への転換

「マジックマッシュルーム使用経験」について尋ねる際、私はヨシキに対して「抵抗」というカテゴリーを用いて「ドラッグイメージ（逸脱へのハードル）」を意識的に持ち込んだ。彼らとの関わりの中で幾度も「ドラッグ」や「マジックマッシュルーム」についてインタビューやトークをしてきたこともあり、規制言説について聞くことがなくなっていた。そこで規制言説の「悪と病い」（Conrad and

## 閉ざされたフィールドを拓く

Schneider 訳書 2003) に代表される「ドラッグイメージ」を意識的に組み込みながら、彼らの解釈実践に改めて焦点を当てた。まず「抵抗」というイメージを持ち込んだ私の質問に対して、当時の経験をヨシキとマッティは「笑いのフレーム」に転換する。そして「マジックマッシュルーム使用」について、「日常生活」では達成できない「おもしろさ」の「共有」として経験が再構成される。

S: ほんと？それは、なんか、抵抗はなかった？マッシュに。

Y: もう、そんな時は。むしろやりたかったぐらいですね (笑)。まわりがもう、みんな経験済みで。(中略) だから、その雰囲気。その輪に入りたいために、経験早くしたい。って。現に経験したら。(中略) 他では。絶対味わえんもんじゃないですか？あの。鏡みたら自分が虎やった、とか (笑)。

S: (笑)

Y: いう話をしてるんすよ (笑)。そしたら、僕はその輪に、絶対、日常生活してたら入れないじゃないですか。で、一緒にそのそのおもしろさを共有できないし。あと、興味が湧くんすよね。ちょっと、やってみたいな、みたいな。僕も虎になってみたいな。(中略) うまいんすよね。またコージロウが、そういうのをこう、みんなに。

M: ノセ方がな。

S: 抵抗ないように？

Y: 抵抗ないように。で、まあ。マジックマッシュは、そんな時は合法やったし、ね。まあ。

M: 俺らは「ナチュラル」「合法」にだまされた (筆者注 マッティは自ら単独でマッシュを入手使用しており、この〈語り〉はコージロウの楽しませ方を表現している)。その二つの言葉に。(中略) あのでかいやつ (コージロウ) がなあ。みんなで楽しいことをしたいっていう人間だから。とにかくもう、楽しいから楽しいからってうまいこと言って。みんなで楽しみたい。すごいやろ、これとかいって。

S: 被害者みたいに言いよるけど、でも、興味はすごいあった訳でしょ？

M: (笑)

Y: そうです。あの。あの頃は結構。コージロウ発信が多かったよねえ。

M: うん。うまいこと楽しませてもらったから。(中略)

Y: そうっすね。(不明) やったか忘れたけど。映画館で観るターザンがヤバイと

か (笑)。あのツタをね。木のツタをこうがーってこう、滑りるシーンがあるんですよ。あの、ターザン目線で。あれが妙にやばかったらしくて (笑)。

この会話を背景的知識としてコージロウに尋ねた時、笑い声を交えて思い出す。

K：ターザン？

S：克明に覚えとったって。ターザンはおもしろいけど、ターザンはすべり降りる瞬間が

K：あー (大きな声で思い出したようにうなづく)

S：あって、あそこがヤバイって。

K：はい。あれは (笑)。そうです、そうですね (笑)。デイズニーはヤバイです。

「抵抗」という言葉でドミナント・ストーリーを持ち込んだ「私」に対して、「笑いのフレーム」に転換し、「ターザン」「デイズニー」といったポップカルチャーと接合して得た経験の〈語り〉と「ヤバイ」という言葉を接合し、マジックマッシュルームの「おもしろさ」と「その共有」を達成する。彼らの〈語り〉の「内容」及び「方法」は、「危険なドラッグ」というドミナント・ストーリーとはかけ離れた解釈実践を表象している。

#### 4.2. 状況依存的解釈資源としての経験の再構成

「もうしないの？」や「またしたいとは思わない？」という言い回しで、ドラッグの「依存症イメージ」を持ち込む私の問いに、コージロウは「サラリーマンじゃなくなって、自分で事業するとかやったら、どうかなあ。やるかもしれん。」と職業アイデンティティに接合して語る。マッティは「失うもんができたんで。家族が。」「そんなばっかしやっとなる親父だったらいかんやろみたいな (笑)」と、「家族」「親父」というアイデンティティに接合する。

マッティもコージロウも、現在では「法律上の規制」については賛成の立場を表明する。コージロウにインタビューを始めてすぐ「禁止されたこと」について尋ねた際、「禁止されてよかったと思う」とすぐに返答した彼の反応と、これまでの調査で「マジックマッシュルーム」の安全性を構成してきた〈語り〉とのギャップに、私は驚きを感じていた。「なんでなん？」という驚きを表現した私の問いは、2002年9月までのインタビューでの認識と現在の彼らの〈語り〉への違和感の表明であ

## 閉ざされたフィールドを拓く

ったが、「マジックマッシュルーム」に対する〈語り〉は彼らの life (人生, 生活) に文脈依存性を持ち, その安全性や危険性はその時々 of Life (人生, 生活) をリソースとして構成されることを示している。そして, 「100%納得はしていないですよ」(コージロウ) という言い回しで法律規制 (危険のレトリックで構成される言説) の受容ではなく, 彼の〈語り〉を了解するように要請する。

S: 今は?

K: 思いますね。ほんとに。

S: え, なんでなん?

K: うーん。(.) 自分をあげる訳じゃないですけど, あれはコントロールするのは難しいです。(中略) ちょっと精神的に, 内向, 内向的というか, そういうやつがいて。(中略) そいつが食ったんですけど。やっぱり, もう, 震えがきてて, でも, 量も少なめとかで食ったけど, ちょっとパニック状態になったんですよ。(中略) 初めて見て。「ああ大丈夫?」って。でも, セッティングは今まで通り。みんなそれで楽しかったでえ, っていう状況で, そいつ食って。でも, もうちょっとおかしくなったんですよ (中略)。そういう風にコントロールできない人が。能力とかじゃなく。あわない人っていうのがいる。いるので。それ見た時に, あ, これヤバイなあって。

コージロウは「マジックマッシュルーム」の回顧的再解釈において, 使用時のコントロール不可能性に関する友人の経験を, パーソナリティに結びついた危険性として語る。そのトラブルを回避してきたコージロウも, 当時と現在を比較して, マッティの経験をも解釈のリソースとして, 現在の生活 (人生についての不安) と接合し, 「マジックマッシュルーム」のコントロールの不可能性 (「落ちる」「怖い」) に再構成する。

そんな時は, 彼女もおったし, で, まだ〇〇 (地名) で, まだ〇〇 (仕事) とかやとったから。まだ, 正直, 夢もあったし (笑)。どうするよ, 俺みたいな奴が, やばいぞ。これから, みたいな。どえらいことになりますよ, 僕中心に (笑) みたいな。(中略) 自分が世界一ちゃうんか, ほんっとにそう思っったんで。でも, 世の中, そんなにうまくはいかんし。やっぱり, もう僕が30代で結婚もまだや, 貯金もあるかっつたら, そんなにない。社会的にみたら, 全然, 安

定もしてない（インタビューの直前に転職）。（中略）景気も悪くなる。老後も、全然、わからないし。（中略）だから、今食ったら、すごく落ちる、と思います。もう、マッティみたいに。一人で落ち込んで。やべえ、俺の人生どうなるんだろう。って、たぶんなりますよ。僕。今食ったら。だから、食わない、でしょうね。怖いでもんね。

コージロウの解釈リソースとなっているマッティの経験は次のような〈語り〉である。マッティはマジックマッシュルームの規制前後に「全部がいつぺんに来た」というように「彼女」「転職」という時期があり、何故やめたかについて現在ではよくわからない、とふりかえる。そして彼は当時の離脱の過程をこのように語る。

S：じゃあその後、クラブとか行かんようになったのはいつぐらいから？

M：クラブは…。今の嫁さんとつきあいだして、それから。あれかな。つきあいだしたぐらいに、最後に、クラブへちょっと行ってその、踊りの方で。イベントにできることがあって。で、向こうももう。その前からもう、そろそろやめようかなと、クラブ遊びも（笑）。仕事がしたくなってちゃんと（笑）。やっぱり、あの、将来的な不安を抱える時だったんでその年が。だからもう、一緒にクラブ遊んでる奴も、30前になって仕事もちゃんとしてないとか。やっぱ、そういった意味では大人になれてない人ばっかしだったんで。だから、それ、そればかりじゃいけない、と。もう切り替える時期が来たかな、と（笑）。（中略）潮時だなど。仕事も真剣に探しよる時に、ちょうど彼女もできて。まあ迷惑もかけたらいけんし。（中略）自分の年齢とか、ま、その立場とか、将来のこととか、20半ばやったらまあ誰でも考える歳やと思うんですけど、考える。それでまあそういう時にマッシュユとか食ったりしたら、落ちだしたんですよ（笑）。

S：あー、そうなんだ。

M：（笑）バッドトリップしだしたから、ああ、こりゃあ、もう潮時だな。精神的な、そういう楽しめる余裕が無くなってきたんだな、と思って。

「バッドトリップ」「落ちる」という負の作用は、パーソナリティのみならず、精神的・心理的状态（「セッティング」）と結びついた経験として語られる。そして使用を楽しんでいた、「精神的な」「余裕」（マッティ）「自分が世界一」（コージロウ）と表現される時期と対比して、仕事や生活上の不安をコントロール不可能性と結び

## 閉ざされたフィールドを拓く

つける。「合法」「ナチュラル」という「マジックマッシュルーム」の安全性を構成するカテゴリー（白松 2004）は、安定的かつ永続的で固定的な使用原因を構成している訳ではない。それは、「マジックマッシュルーム」に関する多様な経験や彼らの様々な life と結びついて、コントロール可能性／不可能性を構成する状況依存的な解釈実践を表象している。

## 5. 問題解決への志向性という視座

最後にエスノグラフィーの問題解決に向けた実践性と有用性について考察したい。それは「解釈実践の『内容』と『方法』に、交互に（またその逆の順序でも）焦点」をあてることで、「理由」に接近していく方法（Gubrium and Holstein 訳書 2006）として議論していくことである。本稿では、「マジックマッシュルーム」経験者に対するインタビューにおいて、「抵抗」（ドラッグへのハードル）や「依存症」のイメージを持ち込むことで、彼らのトークや解釈の「内容」と「方法」を解釈＝記述した。これは「ドミナントストーリー」を調査者が持ち込むことによって、メンバーの「モデル・ストーリー」（桜井 2002）を明らかにする方法でもあった。彼らの「マジックマッシュルーム経験」は「日常生活ではできない」経験として再構成され、「笑いのフレーム」で「おもしろさ」の「共有」が達成される。さらに「マジックマッシュルーム」の負の経験は、彼らの life（人生、生活）とともにリソースとして、コントロール可能性／不可能性を構成するという解釈実践の状況依存性を示している。

このエスノグラフィーの実践性と有用性はどこに求めることができるであろうか。第一に「時を経てフィールドワーカーが学ぶものは、興味の対象である文化に関する解釈の技術である」（Maanen 訳書 1999, 202頁）。本報告で描いた過程は「マジックマッシュルーム」経験者の「解釈の技術」（解釈実践の過程）であり、その過程をマジックマッシュルーム使用の理由として言及しうることをあらためて強調するものである。「楽しんだ経験の内容」や「おもしろさの共有に関する方法」が「笑いのフレーム」における「マジックマッシュルーム経験」の解釈実践を達成する。この解釈実践の過程（内容と方法）は、「マジックマッシュルーム使用」の状況依存的な理由として考察することができよう。これは「論理科学モード」の研究では明らかにできない種類の知見である。

第二は、先行研究の知見との対話である。原因論的パースペクティブと過程論的パースペクティブを分離して考察することも重要であるが、北澤1985がかつて指摘

した対話の方向性は研究の実践性や有用性という要請に対する視座として看過してはならない。例えば本稿の成果を斉藤2002の「差異的接触理論（分化的強化説）」すなわち「非行仲間との接触」を逸脱原因として分析した研究と対比してみたい。斉藤の分析では、Matzaらが指摘するように、接触経験はありながらも非行に入らない経験や一瞬逸脱世界を漂流し、我々の望む社会生活に戻る経験については考察することが困難であり、過程については推論の域をでることはない。一方で「中和」「漂流」（Matza 訳書 1986）や「自己正当化」（Becker 訳書 1993）の概念は、当時「逸脱の理由」として言及されてきたが、それは安定的で永続的な原因ではなく、状況依存的な解釈実践を示した概念として再構成することを提起する。すなわち、「逸脱」の過程は状況依存的な解釈実践の過程であり、その過程を考察することで、「理由」という実践性や有用性に接近する方途が拓かれる。これは「これまでの分析的関心を危険にさらすことなく、理由に関する問いに接近するための一つの手段」（Gubrium and Holstein 訳書 2006, 163頁）であり、限定的な足がかりを提供するものである。

また本報告で描いた解釈実践は「逸脱」と言及される行為ではなく、〈語り〉のリソースとなる「life」そのものに目を向けることを要請する。そして「悪と病い」に代表される「医療」「司法」の世界に閉ざされていった規範的アプローチから失われる人々の生を、「教育学」「社会学」のアプローチで取り戻すことをも要請している。今後、「薬物使用」をなくすという解決の方向性だけでなく、life（生：生活や人生）に着目した〈問題の解消〉（古賀 2004）という解決の方向性が求められるであろう<sup>(3)</sup>。

これらの提案では、まだまだ質的研究の意義を強調するには十分でないかもしれない。しかしながら問題解決の志向性は、「論理科学モード」に特有のものではなく、どのような研究にも多様に拓かれている、ということ指摘するには十分であろう。質的調査が実践性や有用性に意味をなさない道を進むことは、量的調査や多様な認識論との対話を放棄し、自己逼塞的な解釈ゲームに入り込むことによって起こる問題である。それを防ぐためには、実証主義的アプローチによる知見や他の質的調査の知見と照らし合わせることで、公的あるいは個別の問題解決への提案性を展開していく必要がある。

#### 〈注〉

(1) 山田（1998）のエスノメソドロジーについての内省を参考とした。

閉ざされたフィールドを拓く

(2) 「コージロウ」「マッティ」というメンバーについては白松（2004）参照。なお本稿の研究協力者名前はすべて仮名である。

(3) この方向性は古賀（2004）や野口（2005）を参照されたい。

\* なお本研究は、文部科学省科学研究費補助金（若手研究（B）：課題番号18730526）の助成を受けた研究成果の一部を報告するものである。

### 〈引用文献〉

- Becker, Howard S 1963, *Outsiders: Studies in the Sociology of Deviance*, The Free Press, (= [1978] 1993, 村上直之訳, 『アウトサイダーズ』(新装版), 新泉社)。
- Bertaux, Daniel 1997, *Les Récits De Vie: Perspective Ethnosociologique*, Editions Nathan, (=2003, 小林多寿子訳, 『ライフストーリー』 ミネルヴァ書房)。
- Bruner, Jerome 1986, *Actual Minds, Possible Worlds*, Harvard University Press, (= 1998, 田中一彦訳, 『可能世界の心理』 みすず書房)。
- Conrad, Peter and Joseph W. Schneider 1992, *Deviance and Medicalization: From Badness to Sickness*, Temple University, (=2003, 進藤雄三監訳, 杉田聡・近藤正英訳, 『逸脱と医療化』 ミネルヴァ書房)。
- Denzin, Norman K and Yvonna S. Lincoln, 2000, *Handbook of Qualitative Research, second edition*, Sage Publications, (=2006, 平山満義監訳, 『質的研究ハンドブック』 北大路書房, 1巻, 2巻)。
- Emerson, Robert M, Fretz, Rachel I and Linda L, Shaw 1995, *Writing Ethnographic Fieldnotes*, The University of Chicago, (=1998, 佐藤郁哉・好井裕明・山田富秋訳, 『方法としてのフィールドノート』 新曜社)。
- Fine, Michelle, Weis, Lois, Weseen, Susan and Loonmun Wong 2000, “For Whom? Qualitative Research, Representations, and Social Responsibilities” in Denzin, Norman K and Yvonna S. Lincoln, 2000 *Ibid*, pp. 107-131, (=2006, 本郷正武他訳, 「誰のために：質的研究における表象／代弁と社会的責任」平山満義監訳, 前掲書, 北大路書房, 1巻, 87-114頁)。
- Gubrium, Jaber F and James A, Holstein 1990, *What Is Family?*, Mayfield Publishing Company, (=1997, 中河伸俊・湯川純幸・鮎川潤訳 『家族とは何か』 新曜社)。
- Gubrium, Jaber F. and James A. Holstein 2000 “Analyzing Interpretive Practice” in Denzin, Norman K and Yvonna S. Lincoln, 2000 *Ibid*, pp. 487-508. (=2006, 古賀正義訳, 「解釈実践の分析」平山満義監訳, 前掲書, 2巻, 北大路書房, 145-167

頁)。

Holstein, James. A and Jaber F. Gubrium 1995 *"The Active Interview"*, Sage Publications (=2004, 山田富秋・兼子一・倉石一郎・矢原隆行訳, 『アクティヴ・インタビュー』 せりか書房)。

北澤毅, 1985, 「『問題』 行動の社会的構成」, 『教育社会学研究』 第40集, 138-149頁。

古賀正義, 2001, 『〈教えること〉のエスノグラフィー』 金子書房。

古賀正義, 2004, 「構築主義的エスノグラフィーによる学校臨床研究の可能性」, 『教育社会学研究』 第74集, 39-56頁。

Maanen, John V 1988, *Tales of the Field: on Writing Ethnography*, The University of Chicago, (=1999, 森川渉訳, 『フィールドワークの物語』 現代書館)。

中河伸俊, 1999, 『社会問題の社会学』 世界思想社。

Matza, David 1964, *Delinquency and Drift*, New York: John Wiley & Sons, Inc, (=1986, 上芝功博他訳, 『漂流する少年』 成文堂)。

野口裕二, 2005, 『ナラティヴの臨床社会学』 勁草書房。

Pollner, Melvin 1991, Left of Ethnomethodology: The Rise and Decline of Radical Reflexivity, *American Sociological Review*, Vol 56, pp. 370-380.

斉藤知範, 2002, 「非行的な仲間との接触, 社会的ボンドと非行行動」『教育社会学研究』 第71集, 131-149頁。

酒井朗, 2004, 「教育臨床の社会学」『教育社会学研究』 第74集, 5-19頁。

桜井厚, 2002, 『インタビューの社会学』 せりか書房。

白松賢, 2004, 「マジックマッシュルームとは何か」『教育社会学研究』 第74集, 189-206頁。

White, Michael and David Epston 1990, *Narrative Means to Therapeutic Ends*, New York: W. W. Norton & Company (=1992, 小森康永訳, 『物語としての家族』 金剛出版)。

山田富秋, 1998, 「ローカルでポリテイカルな知識を求めて」 山田富秋・好井裕明, 『エスノメソドロジーの想像力』 せりか書房, 56-70頁。

---

**ABSTRACT****Opening up a closed field: An ethnographical study****SHIRAMATSU, Satoshi**

(Ehime University)

This paper attempts to determine a method for making use of the “image of deviation,” which we fieldworkers possess and typically regard as a bias contaminating our research, as a resource for interpretation, and by doing so open the door to the field of “deviation.” Among qualitative studies of educational sociology, only a handful have focused on the self (involvement, attitude, etc.) expressed in the “image” held by researchers. One of the reasons for this situation seems to be the long-standing perception among quantitative studies in educational sociology that the “image” (involvement and attitude) introduced by the researcher is “a potential contaminant” that should be “separated out, neutralized, minimized, standardized, and controlled” (Fine et al. 2000, p. 108)

In this paper, we begin by examining barriers to fieldwork in the area of “deviation” (the problem of fieldworkers being regarded as contamination) and, through research and study in the “narrative mode,” offer direction in shifting to a closed field.

Secondly, we develop a method of description that transforms the fieldworker’s “image” into a resource for research and interpretation. In order to achieve this goal, the “practice of interpretation” must first be described in words, through a transformation of the fieldworker’s “image” into a resource for interpretation; the method of description must also be properly set out and organized, in order to avoid becoming trapped in a “dead end of self-reflection.” We opt to focus on the “writing mode” and “reading mode” (Emerson et al. 1995, p. 63) as methods of description, and adopt a technique by which we avoid the “dead end of self-reflection.” In transforming the “image” into a resource for interpretation, we focus our attention on the distinction between “content” (experience lived and experience described: what is described) and “method” (way of description: how to describe) (Gubrium and Holstein 2000, p. 496). By carefully describing “first person narrative” and “third

---

person narrative," we also explain in this description the process of interaction-based meaning construction.

Thirdly, based on results of actual fieldwork (follow-up survey on persons who have experienced taking magic mushrooms), we discuss ways to move toward practical applications in problem solving. (1) The process described in this paper is the same as the "interpretation technique" (process of interpretation practice) of "those who have experienced magic mushrooms," re-emphasizing that this practice may be referred to as a reason why people take magic mushrooms, and offering hints, though limited, toward answering the larger question of "why people take magic mushrooms." (2) Our next step will be in the direction of initiating a dialogue with the findings of previous studies. The dialogue between "cause approach" and "process approach" is important in terms of practical aspects of this research. For example, we can propose that, based on the results of this paper, the concepts of "neutralization" and "drift" can be reconstructed as ideas corresponding to situation-dependent interpretation practice applied to the deviation category.